



EBARA HATAKEYAMA
MUSEUM OF ART

荏原 畠山美術館

鈴木大介
ミュージアムリサیتال

マテリアル の越境

2025 8.31 Sun.

14:00-15:00

新館1階 多目的室

当日配布パンフレット



©Nobuo Mikawa

ギタリスト 鈴木大介（1970～）

差作曲家・武満徹に「今までに聴いたことがないギタリスト」と評され、国内外で活躍するギタリスト。1993年アレッサンドリア市国際ギター・コンクール優勝。現代音楽の初演やジャズ・タンゴ・自作など幅広く活動し、芸術祭優秀賞やレコード・アカデミー賞をはじめ受賞歴多数。

公演概要

本公演のタイトルと選曲は、鈴木大介氏が展覧会を鑑賞した際に得た着想から生まれました。

「とりわけ印象に残りましたのは、染付のコバルトがペルシャから輸入され、その鮮やかな青で絵付けされた品々が、さらに西方へと輸出されていた、というお話でした。僕の中で、オリエント世界を往来するコバルトのイメージが、異なる国の素材を用いた音楽作品に結びつきました。そこで今回のプログラムには“マテリアルの越境”というタイトルをつけてみました。」異国の文化や旋律が交差して生まれた作品を中心に、東西文化の越境と融合をギターの音色で表現いたします。文化を越える素材たちが織りなす響きを、どうぞお楽しみください。



□本イベント中の 写真撮影・ビデオ撮影・録音はご遠慮願います。

□本イベントの様子を記録・広報用に美術館スタッフが撮影する場合がございます。

本日の曲目紹介

※当日の演奏順は以下の曲目順と異なる場合がございます。
あらかじめご了承ください。

◆ナルバエス「皇帝の歌」

スペインのカルロス1世（カール5世）の時代の音楽です。
当時演奏されていたビウエラというギターに似た楽器は、キリシタンとともに日本にも渡来しました。
この作品は、彼の出生地フランドルからもたらされたジョスカン・デ・プレ作曲「千々の悲しみ」に基づいています。
「千々の悲しみ」は、最初に日本で演奏された西洋音楽ともいわれるほど、当時のカトリック圏で広く親しまれた曲です。

◆西村朗「天女散花」 （カデンツァ版）

京劇の題材にもなったお釈迦さまの伝説をもとにしたギター協奏曲から、カデンツァ部分を抜粋して演奏します。
作曲家ご夫人に特別に許可をいただきました。

◆タレガ作品

タレガの作品には、ペルシャ支配の名残であるムーア人風の旋律と、イスラム文化最後の砦となったアルハンブラ宮殿へのオマージュが込められています。

◆武満徹「フォリオス」

1974年の作品。1972年末に訪れたバリ島でのガムラン体験や、当時影響を受けていたメシアンの影響が反映されています。
さらに、1960年代からの邦楽器研究と西洋的語法の融合が垣間見える作品です。

◆ガーシュウィン 「サマータイム」

戦後、米軍キャンプでジャズに親しんだ武満徹の編曲版で、ジャズの技法がふんだんに盛り込まれています。

◆アルベニス「コルドバ」

イスラム支配の影響が残る街・コルドバの情景を描いた作品です。
メスキータ（イスラム様式とキリスト様式が融合した寺院）や、夕暮れ時にイスラムの楽器を奏でる人々の姿が浮かびます。